

浜からはじめる 復興計画

Reconstruction Planning from the Seashore Villages
牡鹿・雄勝・長清水での試み



青木淳
猪熊純
大西麻貴
小野田泰明
貝島桃代
門脇耕三
城戸崎和佐
近藤哲雄
小泉雅生
小嶋一浩
下吹越武人
曾我部昌史
千葉学
塚本由晴
中田千彦
成瀬友梨
福屋粧子
藤原徹平
藤村龍至
堀口徹
前田茂樹
丸山美紀
宮本佳明
本江正茂
安原幹
ヨコミノマコト

Jun Aoki
Jun Inokuma
Maki Onishi
Yasuaki Onoda
Momoyo Kaijima
Kozo Kadowaki
Nagisa Kidosaki
Tetsuo Kondo
Masao Koizumi
Kazuhiro Kojima
Taketo Shimohigoshi
Masashi Sogabe
Manabu Chiba
Yoshiharu Tsukamoto
Senhiko Nakata
Yuri Naruse
Shoko Fukuya
Tepei Fujiwara
Ryuji Fujimura
Tohru Horiguchi
Shigeki Maeda
Miki Maruyama
Katsuhiro Miyamoto
Masashige Moteo
Motoki Yasuhara
Makoto Yokomizo

アーキエド・編 ArchiAid



求められる復興計画をめざして

Toward Feasible Reconstruction Planning for the Disaster Areas

津波に襲われた地域では、過半の構築物が押し流され、自然がむき出しとなる情景があちこちに広がっている。こうした衝撃的な光景は、私たちに人間の無力さを見せてける一方で、「何か」を支援したいという情動を引き起こし、多くの人びとを被災地に吸引する。そうした思いは多くの建築人にも共有され、避難所の居住環境の改善、復興の可能性を探るワークショップ、みなが集まれる小さな建物、温かみのある仮設住宅など、これまでに意義のある貢献が行われてきた。

そうした試みが、いかに被災地を勇気づけたかについては、いまさら言うまでもない。しかしながら、復興は建築、土木、産業などの事象を地域社会と一体になって解かなければならない時間のかかる複雑な方程式でもある。解決に向けて駆動するこの大きなシステムと向き合う面倒な領域においても、何かすべきことがあるのではないだろうか。特に、今回大きな被害を受けた東日本の沿岸部は、人びとが自然の恵みをうまく活用して生活を成立させてきた地域であるとともに、発災前から人口の流出や高齢化に苦しんできた難しい場所でもある。これらの地域をいかに再生させていけるのか。困難ではあるが、正面から、じっくりと向き合う活動が求められている。

こういった問題意識を受け止めて組織されたのが、建築家による被災地支援ネットワーク「アーキエイド」である。「アーキエイド」は、復興のための人材供給や教育支援、情報共有などを展開しながら、実践的な事業を通じてプラットフォームとしての組織のありようを検証し続けている。その大きな柱の1つとして、宮城県石巻市牡鹿半島で実施されているのが、建築家とその学生が半島全域の浜に張りついて、復興図を描く支援をする本プロジェクトである。その実際について紹介する本書が、地に足のついた今後の復興の一助となれば幸いである。

Reconstruction is a complex equation involving the interworking of domains such as architecture, civil engineering work, and industry. However, isn’t there something that can be done to address the thorny problem of an unwieldy system leading to an eventual solution? The coastal areas of eastern Japan were hard hit by this earthquake disaster. While in these areas, the inhabitants had prospered from the rich natural environment, from another perspective, social issues such as population outflow and an aging society had already become serious before the disaster. Can this area somehow be brought to life again? Although these districts face difficult problems, we should work methodically toward their regeneration.

Brought together by their awareness of these issues, volunteer members organized “ArchiAid”, a network of architects for relief and recovery in the disaster-stricken areas. The network’s activities include the supply of human resources, educational support, and information-sharing for the purpose of reconstruction, while at the same time the network directly controls some projects in the disaster areas and attempts to observe the system in practice as a platform to reinforce its diverse reconstruction activities. One of the most important projects was conducted on Miyagi Prefecture’s Oshika Peninsula, at Ishinomaki City, where during a workshop architects and students walked around the harbor districts of the peninsula, spoke with inhabitants and thought about reconstruction planning. This book presents a series of the gathered results. The network continues to the support activities at present. We hope this book proves a useful and well-grounded resource to those who would consider reconstruction work in future.

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

小野田 泰明

牡鹿半島と3.11

The Oshika Peninsula and 3.11

牡鹿は、宮城県の東端、太平洋に向かって大きく突き出した、南北約20km、東西約4kmの半島で、先端には、古くから東北三大霊場の1つとして信仰の対象となっている島、金華山が浮かんでいる。金華山沖という言葉が示すように、その沖合は潮流の関係から多くの魚が集まる場所でもある。リアス式である半島の海岸には良港となる入り江が連なっていることもあって、古くから沿岸漁業が盛んであったが、近年では水のきれいな湾を活用した養殖漁業が主流となっており、仙台湾に面した比較的波の穏やかな半島西岸ではカキが、太平洋に面した裏浜ではホヤが養殖されるなど、浜の特徴を生かした多様な海産物に恵まれている。

発災前は、半島の過半を占める旧牡鹿町エリアで約4,800人、半島の根元の旧石巻市荻浜地区を入れると5,000人弱が、この半島で生活していた。半島全体で30の浜があるのだが、その中でも最大のまちが、半島先端西岸に位置する鮎川である。もともと小さな漁村であったこの場所は、明治以降、沿岸捕鯨が盛んになるとともに賑わいを見せ、最盛期の1950年代後半には、現在の3倍近くの人びとで賑わっていた。しかしながら、捕鯨産業の衰退とともに人口は減少して、発災前は1,400人、しかも減少は続く傾向にあった。このように、豊かな観光・水産資源に恵まれながらも、人口動態としては厳しい環境にあった牡鹿半島は、3.11によってさらに難しい状況に直面する。

3.11の地震の激しいエネルギーは、この半島を東南東に約5.3m、鉛直に約1.2m動かしている。震源地に最も近いだけに、これは被災地の中で最も大きな変異量だ。実際の被害もちろん甚大で、地理的な理由から軽微な被害で済んだ2、3の浜を除き、ほぼすべての浜が手ひどい被害を受けている。仙台湾に面した表浜では高台にあるいくつかの住宅が被害を免れることができたが、外洋に面した鮫浦湾では、鮫浦、大谷川、谷川、祝浜の4つの浜のほぼ全戸が流出、中心部の鮎川も低平地に集積していた漁業、観光、商業、居住の機能の過半を失った。市の中心である旧石巻市街が冠水してマヒ状態に陥ったことや、半島につながるすべての道路が寸断されたことなどから、半島全域で発災後しばらく陸の孤島状態が続くこととなった。電気、ガス、水道のないなか、高台で被害を免れた人たちが自宅を避難場所として開放し、身を寄せ合って救援を待ったのである。また、半島全域の海岸で養殖いかだや荷揚げのための設備が破壊されるとともに、岸壁の多くが沈降して使えなくなるなど、産業面でのダメージも甚大である。

The Oshika Peninsula, located on the eastern side of Miyagi prefecture, projects out toward the Pacific Ocean. Its size is 20 kilometers from north to south and 4 kilometers from east to west. Near its tip is Kinkazan Island, believed from long ago to be one of the three major sacred grounds of the Tohoku area. Off the coast, the current produces an excellent fishing ground. Additionally, the peninsula has many coves unique to its sawtooth coastline, which make good ports, and are suitable for aquafarming the oysters and ascidians particular to each cove's special character. Nearly 5,000 people lived on the peninsula before the disaster. Ayukawa, situated on the western side of the peninsula's tip, is the largest town of the 30 harbor districts. The town prospered as a center of whale hunting from the Meiji era onward. However, the whale hunt industry (and along with it the population) went into decline during the latter half of the 1950s. Since then, its society has always faced the problem of an aging population. The 3.11 earthquake moved the peninsula approximately 5.3 m toward the east-southeast, and about 1.2 m vertically. This movement was the largest in the affected area and the damage was absolutely ruinous. Nearly all the peninsula's harbors lost a substantial portion of their functional capacity in terms of fishing, tourism, industry and housing. Moreover, the marine industry suffered serious damage such as destruction of farming rafts and docking facilities, and many quays throughout the peninsula became submerged. The peninsular area was isolated for days after 3.11, but the inhabitants patiently waited to be rescued, helping each other in conditions without electricity, gas and water. As this predicament reflects, this is an area inhabited by a tough and dependable people.



before 2011.3.11



2011.7.21

^ 鮎川ホエールランド周辺 | 鮎川漁港 v



before 2011.3.11



2011.7.21

牡鹿半島復興支援調査隊とは

What is the research team for reconstruction support in the Oshika Peninsula?

半島を構成する30の浜は、その1つひとつに個性があるだけでなく、震災での被害の状況もそれぞれ異なっている。こうした個別性を尊重し、そこに住む人たちと一緒に地域の未来を考えるべく、建築家とその研究室の学生で構成された15のチームが全国から半島に集結した。これが、「牡鹿半島復興支援調査隊」である。地形や環境を読む力に長け環境の可能性を見通せる建築家と、これからもさまざまな場所で空間の創出にかかわっていくであろう建築を学ぶ学生たちの能力やポテンシャルを活用していくことで、住民の方々の幅広い声が集約され、それぞれの地域の実情に根差した復興案が導き出せるのではないかと、この期待を込めて。

また、この事業の特徴は大きく下の6つのキーワード、

1——建築家による復興支援

2——浜の個性

3——浜間の関連性

4——手法の専門性

5——継続的かかわりと実践への反映

6——強固なプラットフォーム

にまとめられる。

4泊5日のワークショップ期間中、彼らは足を使い浜の特徴や被害状況を調査し、住民の声を丁寧に聞き取り、手を動かして未来の絵を描いた。電気も水道もまだ復旧が進んでおらず、ネット環境もないという状況のなかでのワークショップでは、普段使い慣れているパソコンと向き合う代わりに、浜の自然に触れ、地形を深く読み取り、住民と向き合い、全身で牡鹿半島の自然を体験することから案を考えなければならぬ。その足は牡鹿半島の起伏に富んだ山々の地の感触を、その目は海と山に囲まれた本来は美しい浜の景色を、その耳は被災した方からの切実な訴えをよく覚えているだろう。さらに、彼らがこの震災の被害の大きさを目の前にすることは、これからの復興の長い道のりに向き合うきっかけともなっているはずである。

及川恵子[アーキエイド事務局]
小野田泰明

6つのキーワード

1 建築家による復興支援

reconstruction support by architects

1.被災により顕わになった自然環境の特性を的確に読み取る。2.失われた集落のコミュニティの特性を丁寧な聞き取りを通じて再構築できる。3.そうして得た知見を具体的な計画提案としてまとめ上げることができる。など、建築家には復興に必要とされる能力が備わっている。組織化が難しいため、被災地に届けることが難しかったこうした能力を体系的に供給する

2 浜の個性

individuality of the Shoreline

自然の恵みを最大限に活用するため、浜には独自の生態系がある。建築家を活用しているのは、こうした個性の扱いに高い対応性を示すからでもある。また、そうした優秀な人材を各浜に張りつめるために、短期集中型のキャンプの手法を牡鹿半島復興支援調査隊では採用している

3 浜間の関連性

connectedness of the various shoreline areas

それぞれに個性を有している各浜であるが、実際には、日常生活における交流や縁戚関係などによって緊密に結びついている。一方、復興事業としての合理性を考慮して、浜間でのインフラ共有の可能性を探る必要がある。そのため活動の方でも、各浜には担当を振りながらも、合同合宿、合同レクチャー、合同発表など、相互に協調する枠組みを整えている

4 手法の専門性

methodological expertise

事前に近接する半島で試行事業を展開し、フィールドノートのまとめ方等の方法論を精査・フィードバックしている。また、東北大学防災科学研究拠点の全面的協力による津波や地域文化に関するレクチャー、土木計画手法や復興制度の習得のための継続的勉強会など、専門性を上げるしくみが組み込まれている

5 継続的かかわりと実践への反映

successive relationship and reflections of implementation

住民の意見や場所の特性を継続的に反映させながら改善された各チームによる成果は、アーキエイドを媒介として、石巻市の復興関係部署や担当の土木コンサルタントにつながれ、いくつかのやり取りを経て反映されている。サマーキャンプから始まった、浜と各チームとのかわりは現在も続いている

6 強固なプラットフォーム

sturdy platform

これらの独自性、共同性、専門性、継続性を担保しているのが、個別の活動を支え、外部の関係者との調整を行うプラットフォームであり、これこそが復興の現場で強く求められているものでもある。こうした事業の展開を通じて、「アーキエイド」は被災地に本当に必要とされる専門的支援の在り方を確認・修正していくことになる

*牡鹿半島に近接する雄勝半島において、先行的に展開した東北大学建築設計D雄勝スタジオ(担当:ヨコミゾマコト、堀口徹、菅原麻衣子/アドバイザー:小野田泰明/2011年5月10日~7月23日)の知見が随所に生かされている。

【活動経過】

2011年6月24[金]-30日[木] サマーキャンプ参加チーム募集

「牡鹿半島の過去をともに学び、地元住民の方とともに、このまちの未来について考え、現在の姿をともに世界へ伝えていくこと」をテーマに、サマーキャンプの開催と参加チームの募集をアーキエイドのウェブサイトにて告知。募集期間が短かつたにもかかわらず、全15チームの参加が決定。大きな爪痕が残った牡鹿半島の未来に光を照らす、牡鹿半島復興支援調査隊がここに発足した。

6月30日[木] サマーキャンプ説明会 @東京工業大学大岡山キャンパス

関東近郊にある大学の参加教員・学生のみならず、関西からも多くの方が参加。サマーキャンプのコンセプトやスケジュールについての説明が行われ、各チームに牡鹿半島の中で調査を希望する浜を挙げてもらうなど、現地での調査へ向けた作業が着々と進む。今、どうして牡鹿半島での支援が必要なかを理解してもらうと同時に、牡鹿半島の歴史などにも触れ、現地の理解を深める勉強会のような機会もなかった。

7月5日[火]、6日[水] プレリサーチ

天気に恵まれた2日間。集合場所となる荻浜中学校へ向かう途中に見える浜々は、まだ瓦礫の片付けすら行われておらず、思わず目をつぶりたくなるような光景が続いていた。そんななかで行われたプレリサーチ。約30名が参加した。

1日 東北大学の今井健太郎先生による津波レクチャーや、牡鹿半島の地理や歴史についてのレクチャーを受ける。その後、各自が担当する浜へ向かい、区長さんに挨拶を行うなど、2日間の調査をスタートさせる。

2日 日の出とともに起床し、早朝から調査を開始するチームも見られる。浜の地形や歴史の調査だけでなく、浜の住民の生活などにも触れ、サマーキャンプ本番へ向けた準備を進める。

7月20日[水]-24日[日] アーキエイドサマーキャンプ 「半島へ出よ」開催

1日 **ガイダンス、フィールドワーク**
台風直撃という悪天候のなかを迎えた初日。犠牲となった方へ黙祷を捧げ、ガイダンスなどを行った後、それぞれのチームが担当の浜へ向かい調査開始。豪雨のなかフィールドワークを行うチームもあり、びしょ濡れになりながらも被災した浜を歩き回った。

2日 **フィールドワーク**
1日を通して各チームは調査を行う。模型を囲みながら意見交換を重ね、住民

の方からさまざまな声を引き出し、これからの復興案についての考えをまとめていく。

3日 **提案作成 / 住民の方とバーベキュー**
各チームとも初日、2日目の調査をもとに、翌日行うプレゼンテーションに向けた資料を黙々と作製。色鉛筆やペンなどを使ってひたすら手を動かしながら次々に未来の牡鹿半島の姿を描き出していき。夜には大原中学校にて住民の方を交えたバーベキューを行う。参加した学生は、普段聞くことのできない海に生きる男たちの声に耳を傾けた。

4日 **住民へのプレゼンテーション**
それぞれの浜の住民に向けたプレゼンテーションを行う。先生にエスキースをしてもらうかのように、集まっていたいた住民の方を前に、1つひとつの案について説明を加えていった。その後、翌日に控えた全体講習会に向けた作業が夜通し進められた。

5日 **全体講習会**(鮎川小学校体育館にて)
サマーキャンプ参加の全15チームが集まり、合同講習会を行う。ゲストに地域エコノミストの藻谷浩介氏を迎え、建築やまちづくりの視点だけではなく経済の視点からの意見も飛び交う会となった。石巻市長も参加し、参加チームそれぞれが作製した案や模型をご覧になった。

2011年8月 石巻市へ提案書を提出

サマーキャンプで各チームが作製した6枚のデータシートは、アーキエイドによってまとめられ石巻市へ提出された。石巻市ではそのデータシートを復興計画案の素案として活用している。

8月6日[土]-11月26日[土] 「新・港村 小さな未来都市」での展示

横浜トリエンナーレ関連企画、「新・港村 小さな未来都市」にて、サマーキャンプの成果物を2チームずつ、1週間交代で展示。展示ブースは関東在住の学生スタッフが作製。また、9月23日(祝)-10月23日(日)に行われた「震災とクリエイティブ」では全チームの模型を一堂に展示。サマーキャンプ最終日に行った合同講習会のようにすべてのチームの復興案を張り出し、関東でも牡鹿半島の未来について考える場となった。

2012年3月 牡鹿半島での支援活動継続中

サマーキャンプの終了後もそれぞれのチームは担当した浜を継続的に訪れ、住民との意見交換などを行っている。また牡鹿半島で行われるお祭りや復興活動にも参加し、住民との交流をより深いものにしようと活動を続けている。今後も牡鹿半島復興支援調査隊は、牡鹿半島の復興を見届けるまで継続的な支援を続けていく。



プレリサーチ (7月5、6日)



サマーキャンプ (7月20-24日)



サマーキャンプ全体講習会 (7月24日、鮎川小学校にて)



「新・港村 小さな未来都市」での展示 (8月6日-11月26日)



法政大学の継続支援活動の様子 (11月24日)

4 なりわいに出会う

貝島桃代×近藤哲雄×下吹越武人



浜のなりわいを理解する

貝島 ー 私たち筑波大学が調査した桃浦①、月浦②、侍浜③は、それぞれ約60世帯、30世帯、10世帯と規模は異なりますが、主ななりわいはカキ養殖です。なかでも桃浦は、県が管轄する第2種漁港として整備された大きな浜で、西側にある萩浜小学校には、月浦や侍浜の子どもたちも山を越えて通ってきています。

この地域で行われているカキ養殖の方法は、カキの種を植え付けた10mのロープを100m角の筏に組み、沖に出して養殖する垂下式です。毎年お正月には、その年の予定を決めてしまうそうですが、春に種を植え付け、夏は近場の海に筏を置き、秋に筏を沖に出して荒波にもまれながらプランクトンをいっぱい食べさせて太らせる。そして翌年の冬に収穫するというのが基本的なサイクルです。

こうした養殖方法のほか、海水温や海流をどう読みどこに筏を置くかというノウハウがこの20-30年で蓄積され、安定した収穫を得られるようになった。カキ養殖は70歳ぐらいまで働ける仕事なので、桃浦のように後継者不足が心配されていたところでは、定年退職した人に来てもらう道はないかと相談していたそうです。次の世代への伝授を模索していた矢先、今回の津波で一挙にそれが失われてしまった。

漁師さんは、一家で7-8台の筏を持っていますが、みんなで沖に運んだり、浜を掃除するなど共同作業も大切にしています。それぞれ自立した自営業でありながらも、共同体としての絆も強く、厳しい自然や危険と日々向き合っているためでしょうか、大変たくましい。いわゆる組織勤めの人とは違う、個人で活動をしているという点では建築家と近い印象を受けました。

下吹越 ー 僕ら法政大学が担当したのは、桃浦に隣接している萩浜④と小積浜⑤です。その昔、萩浜は日本郵船の停泊地だったこともあり、牡鹿地方の入り口としてにぎやかだったそうです。昭和の初めになると「垂下式養殖」を考案した宮城新昌という人が、万石浦に続いて萩浜湾で大規模なカキ養殖と種ガキの採苗を行い、養殖技術を確立しました。この浜から種ガキがフランスやオーストラリアなどに輸出されたとも聞きました。カキ養殖の発祥地であることが、地元のプライドにもなっているんです。また、石





30浜の診断カルテ



Diagnoses of the 30 Seashore Villages

診断カルテとは、アーキエイドサマーキャンプとプレリサーチ時に調査・記録した浜の特徴、被災状況、産業などのデータを、浜ごとにまとめたものである。これらはサマーキャンプ終了後、石巻市へ提出した提案書の1部として盛り込まれた。本書ではそれに加えて、各浜の魅力、震災前にはどんな暮らしがあったのかなども記載し、資料としてだけでなく、牡鹿半島のガイドマップの役割も果たすものにもなっている。

及川恵子(アーキエイド事務局)

基礎データ data



- 1 震災前 data before disaster
人口 population
世帯数 number of households
建物数 total number of buildings
高齢化率 population aging rate
- 2 震災後 data after disaster
人口 population
世帯数 number of households
被災建物数 number of damaged buildings
残存建物数 number of remaining buildings
被災率 damage rate
- 3 避難所 evacuation center
- 4 仮設住宅 temporary housing
- 5 被災者避難者数 number of refugees in the village
- 6 被災者避難者数 number of refugees outside the village but in the peninsula
- 7 震災前主要産業 major industry before disaster
- 8 観光 sightseeing area
- 9 漁業被害 fisheries industry damage
- 10 ライフライン+避難経路 lifeline

凡例 legend

- 漁業関係エリア fishery industry area
- 商店エリア commercial area
- 公共施設 public facilities
- 寺社 temples and shrines
- 残存 remaining buildings
- 被災(半壊) partially destroyed buildings
- 被災(全壊) destroyed buildings
- 仮設住宅建設地 temporary housing site
- 等高線ピッチ contour interval

W01	小竹浜	東京大学隈研吾研究室+千葉学研究室+藤原徹平	064
W02	折浜		068
W03	蛤浜		068
W04	桃浦	筑波大学貝島桃代研究室	070
W05	月浦		072
W06	侍浜		072
W07	萩浜	法政大学渡辺真理+下吹越武人インディペンデントスタジオ	074
W08	小積浜		074
W09	牧浜	神奈川大学曾我部昌史研究室	076
W10	竹浜		078
W11	狐崎浜		078
W11.5	鹿立屋敷	名古屋工業大学北川啓介研究室+近藤哲雄	080
W12	福貴浦		080
W13	小網倉浜	東洋大学工藤和美・藤村能至研究室	082
W14	清水田浜		087
W15	大原浜	大阪工業大学前田茂樹研究室	086
W16	給分浜		086
W17	小淵浜	東北工業大学福屋穂子研究室+東京理科大学 water edge studio	088
W18	十八成浜	京都工芸繊維大学仲隆介・城戸崎和佐研究室+神戸大学遠藤秀平研究室・櫻橋修研究室+山岸鏡	090
W19	鮎川浜	横浜国立大学大学院 Y-GSA 小嶋一浩スタジオ	092
W20-1	長渡浜	東京理科大学安原幹研究室+有志+SALHAUS	094
W20-2	網地浜		094
E01	前網浜	大阪市立大学宮本佳明研究室	096
E02	寄磯浜		096
E03	鮫浦	東京工業大学塚本由晴研究室	098
E04	大谷川浜		098
E05	谷川浜		100
E06	祝浜		100
E07	泊浜	首都大学東京小泉雅生研究室+門脇耕三+猪熊純	102
E08	新山浜		102

*宮城県石巻市牡鹿地区地域基礎データ(2011年10月6日)を参考に、現地調査結果に基づき作成した(データ作成者:アーキエイド/サマーキャンプチーム)。

鮎川浜 | Ayukawahama

捕鯨でにぎわう 半島の拠点都市

南三陸全半島国立公園に属する、牡鹿半島最大の浜。
国道の終着点に突然市街地が出現する。
震災前の人口1,400人(復興時代8,000人)。
仮設商店街・仮設市場も再開。
全半島観光の拠点でもある。

調査資料作成者

横浜国立大学大学院 Y-GSA 小嶋一浩スタジオ

震災前

人口 1,407人
世帯数 699世帯
全戸 699戸
高齢化率 42%

震災後

人口 1,233人
世帯数 628世帯
被害住戸 376戸
残存住戸 323戸
被災率 53.8%

避難所

総合支所(20世帯)、清優館(20世帯)、清心苑(3世帯)、
集会場(10世帯)、斎場(2世帯)、ニューさか井(5世帯)

仮設住宅

鮎川小学校グラウンド(58戸)、牡鹿中学校駐車場(23戸)、
清崎公園駐車場(14戸)、清崎山地区(16戸)、鮎川浜地区(38戸)、
旧牡鹿保健センター(8戸)

地区内避難者

1,090人

地区外避難者

地区外、半島外合わせて317人

震災前主要産業

船漁業(サンマ、イカ、イサザ、オキアミ等)、定置網漁業(イワシ、サバ、サケ)、養殖漁業(黒サケ、ワカメ)、捕鯨、飲食、
観光、工芸、石材

観光

施設 | 民宿(7施設)

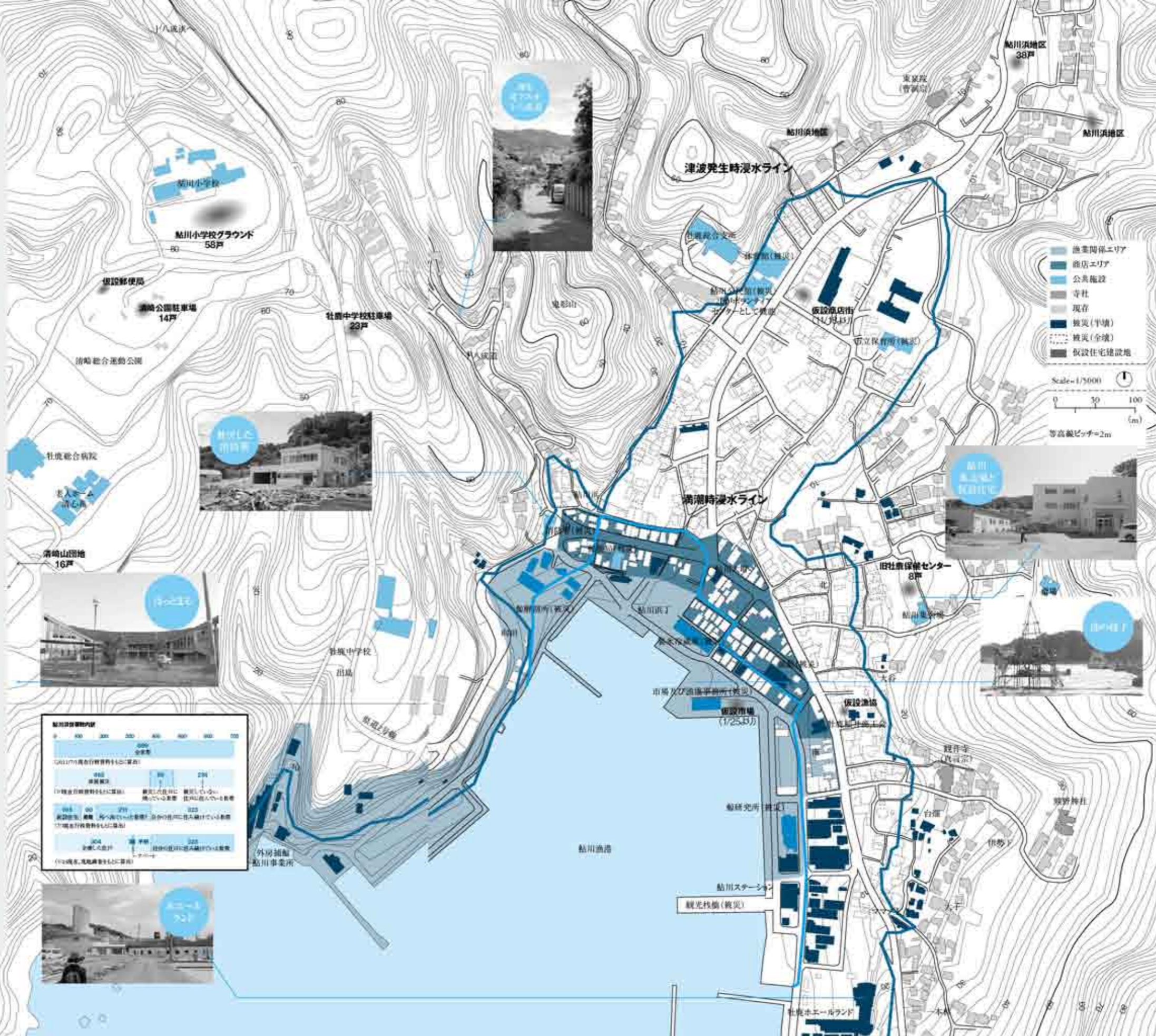
イベント特徴 | 浜っ子祭(5月)、くじら祭(8月)

漁港被害

港湾施設(被害の大きさ) | 防波堤(大)
水産施設(被害の大きさ) | 市場(大)、漁協事務所(大)

ライフライン+連絡環境

水道 ○ | 電気 ○ | 電話 ○



鮎川浜主要施設	0	100	200	300	400	500	600	700	800
02011711 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011712 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011713 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011714 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011715 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011716 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011717 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011718 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011719 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011720 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011721 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011722 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011723 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011724 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011725 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011726 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011727 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011728 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011729 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011730 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011731 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011732 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011733 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011734 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011735 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011736 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011737 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011738 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011739 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011740 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011741 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011742 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011743 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011744 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011745 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011746 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011747 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011748 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011749 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02011750 高倉行徳事務所(仮設)	0	0	0	0	0	0	0	0	0

